The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	頼春水在坂時代の中井竹山との交遊
Author(s)	頼, 祺一
Citation	懐徳. 1983, 52, p. 29-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

頼春水在坂時代の中井竹山との交遊

頼　祺一

一

広島藩儒頼春水（一七四六―一八一六）が、つねに手元に置いて、その見聞や心覚えを記録していった手控の帳面の一つである『掌録甲寅―庚申』の寛政十一年（一七九九）のところに、次のような記事がある。

寿巻姓名

○三宅正誼　字子和、号春楼、才二郎　大坂学校都講
（朱点、以下同）
、中井積善　字子慶、号竹山、善太　同上
○土生晋民　字房夫、号中南、平賀総右衛門　本藩豊田郡本郷人、是時為大舎人
○河　子龍　字伯潜、号南浜、河野忠右衛門　鍋島侯邸司
○隠岐秀明　字子遠、号誠甫、宇右衛門　大坂城与力
○吉松　修　字潤甫、号文山、儀一郎　亀井侯儒臣
○早　辨之　字士誉、号仰斎、永介　大坂処士、業儒
○片　猷　字孝秩、号北海、中蔵　越後処士、業儒、住大坂
○鳥　宗成　字世章、号松岳、宇内　越前人、医業、住大坂
○田　章　字子明、号鳴門、田中七郎右衛門　大坂処士
○平　義綱　字紀宗、平井斎次　近江人、隠士
○北山　彰　字元章、号橘庵　河内一屋村人、医業
○吉田宜方　省吾　伊予宇和島士人
○江村　綬　字君錫、号北海　京人、儒業
篠　応道　字安道、号三島　大坂処士、儒業
○萱野来章　字君誉、号銭塘　肥後細川士人
○隄　寛　字子容、号中洲、庄兵衛　伊予松山士人
○源　義張　字琴王、左馬介　京人、阿波平島館賓、儒業
、合　離　字麗王、号斗南、半斎　京人、儒業
○合　達　字長弥　合離子

張　天雨　字伯龍、長崎亀五郎　大坂買人
古　樸　字淳風、号精里、古賀弥助　肥前士人
、岡　豹　字君章、号静所、岡田善次　阿波士人
原　惟孝　字友于、原文盛　京人、医業
。曽　之唯　字希曾、曽谷仲助　京人
、清　勲　字公績、清田大太郎　京人、越前儒臣
井坂広正　字霊卿、六郎右衛門　大坂人
。西邨　直　字孟清、号古愚、仁右衛門　大坂人
。山崎　寛　字玄通　豊後小倉人、医業
、斎藤孟翼（馮）　字孟翼、嘉右衛門　鍋島士人
尾藤　肇　字志尹、号二洲、良佐　伊予人、儒業、住大坂
菅　晋帥　字礼卿、号茶山、太中　備後神辺処士
。趙　陶斎　名養、字仲頤　西土人之子、住泉左界
。福　五岳　名絢、字太初　備後尾道人、業画
。葛　張　字子琴、橋本貞元　大坂人、業医
。田　政　字士徳、六兵衛　大坂人

三十五名（ママ）　二十三人亡今存者十二人

「七人（朱筆）文化九年壬申」

「寿巻」とは「丙申寿巻」のことで、安永五年（一七七六）丙申に、当時大坂に住んでいた春水が、郷里安芸国竹原下市にあって七十歳をむかえた父惟清（号亨翁）のために、先輩・知友に依頼して書いてもらった寿詩等を、春水手づから二巻に仕立てたものである。上巻は、三宅春楼の「令徳寿豈」の四大字をもって巻頭とし、以下中井竹山から篠崎三島までの一四名をおさめ、下巻は、萱野銭塘以下森田士徳までの二一名をおさめている。

いま、これらの人びとと春水の関係を述べる余裕はないが、平賀中南は春水在郷時代の学問の師、趙陶斎と片山北海は上坂以来の書および学問の師である。春水もその一員であった北海を盟主とする詩社混沌社の当時のメンバーはほぼ網羅されている。社の長老鳥山崧岳・田中鳴門、以下細合斗南・篠崎三島・福原映山・萱野銭塘・葛子琴・隠岐茱軒・西邨古愚・河野恕斎・岡田南山・井坂松石らである。混沌社中とも親しく交流した江村北海・平井聴雨・北山橘庵・清田龍川（江村北海の子で儋叟の養子となる）ら、ほかに京都の詩人たちの名も多くみえる。石州津和野の吉松文山とは、その父正敬（大坂蔵屋敷詰）以来の知己で、春水はこの年懐徳堂の『大日本史』を筆写して同藩に納めている。西国諸藩の「士人」たち

との交流も多い。

尾藤二洲は春水と同門で、当時はともに少壮の朱子学者として大坂で門戸をはっていた。やがて安永六年の暮、古賀精里が京都から大坂へやって来て、彼らと朱子学「同志」となる。備後神辺の菅茶山は那波魯堂の弟子で、明和年間以来しばしば上京し、春水とは安永二年からの旧知である。

そして中井竹山。竹山と春水との関係は次項以下で述べることとして、懐徳堂主三宅春楼の次に、竹山の一文を配したのは、春水としては十分に考えたうえでのことであったと思われる。後年に至っても、最も春水が尊敬した先輩が竹山であった。早野仰斎は竹山の弟子である。ちなみに趙陶斎の弟子で、春水在坂中のパトロン的存在であった森田士徳（籾の両替屋吹田屋六兵衛）を寿巻の殿に配したのも春水の性格をよく物語っている。

春水はこの寿巻を最も大切なものとして愛蔵した、と思われる。寛政十一年、寿巻姓名を記したとき、三五名（三宅春楼は人数に入っていない）のうちすでに二三名がこの世の人ではなかった。人名の上に。印を付けた人びとである。春水は広島藩儒となって大坂を去ってからも、在坂中の先輩・知友とは常に親しく連絡をとりあってい

た。春水が晩年に至って在坂中の諸家との交流を『在津紀事』二巻にまとめたのは、彼の人生において、その時期やその頃の生活がいかに憶い出深いものであったかを示している。寿巻姓名のあとに「七人 文化九年壬申」と朱書した年は、『在津紀事』脱稿後二年目のことである。文化九年（一八一二）といえば春水は六七歳である。この時の生存者は七名、寛政十一年からこの間に五名が世を去った。人名の上に朱点を付けた人びとである。

翌文化十年には篠崎三島・尾藤二洲が没し、さらに同十三年には春水自身が棄世する。

二

中井竹山（一七三〇―一八〇四）は、春水より一六歳の年長である。安永五年には春水三一歳、竹山四七歳となる。春水と竹山が、いつ頃、どのような経緯で知己となったかはよく分らないが、『在津紀事』の記述と、「丙申寿巻」中の竹山の文章によって、おおよそのところは知ることができる。

送頼君千秋帰省啓尊大人七秩寿筵序

芸国頼君千秋、初以舞象之齒、来遊吾土、屈人嘖々乎称神童、余聞之曰、善矣未也、凡童而神、壮或不

霊、夫人淂無有乎爾則可、去数年、弁而復来、衆益賛之、殆不容口、余亦稍〻伝其辞章、誦之曰、美矣未也、盖才貴其真、苟不真于才、必疵于徳、以扇倨傲而鼓浮蕩、夫人淂無有乎尓則可、居数年、獲相見於平寿王氏、則其容粛、其色温、与之言、警敏而端懿、謙和、扣其学深、厭近世詭僻悠繆之説、必平易典実之求、而正大精確之帰、睹其断章而賦累牘、揮翰恰如峻湍之水、奔駛瀺灂、沛乎以逝、余之往日過慮者一無之、而所見踰所聞万〻、廼盎然心酔、遂与定交、已而受読其負剣録、盖奉其尊人、歴覧奥羽之藉也、游已壮矣、文亦偉矣、乃若日夕引翼、承意尽歓之状、藹如可掬、乃廃書而歎曰、有是哉、千秋其有基若茲、夫行百而善万、挙従此而推焉、宜矣哉、身守布素、而声馳一世也、歳丙申之春、君将千里寧覲、盖尊人老益康彊、今也其杖自郷達国、乃併欲萃族属朋旧以為之寿也、軷祭且有日、過而謂余曰、盍為我一言賁行且以致祝于家庭、余曰諾哉、余嘗聞之也、尊人夙昔有志願三焉、其一曰我幸有丈夫子、我不必欲其貴美富厚以大我門、但願使之為天下知名之士、其二曰我好国詩愛山水、我不必欲足跡徧四方、但願一観於富獄松島、其三曰郊邑之民草屋其恒、我郷頗殷賑尤戒於火、我不必欲峻宇広厦以便乎安佚、但願瓦屋而屈焉、君之二弟、才性相亜、留在膝下、共克家而能取贏、去歳度土功、一新廬宅、悉瓶之、伯氏之事既如彼、叔季氏之為又如此、尊人志願畢矣、今而後益安其養、心益愉、体益舒、則松栢其資、岡陵其寿、以副三子者頌禱之意、凡百室家之慶、愈臻弗罄焉者可知也已、吉人天之所祐、余竊必之於天也、遂叙以為贈、君也既帰、釃酒撃鮮、以肆賓筵、滫瀡列而斑斕舞之日、誦是言以命酌者亦可乎、

安永丙申仲春

浪華竹山居士中井積善拝撰

以上が竹山の文章の全文である。春水の人物・学識を賞讃し、あわせてその父の人柄をも顕彰して余すところがない。書は、春水が「春楼・竹山一社を成す。書法、皆、碩菴より来る。」(『在津紀事』原漢文。頼惟勤氏の「在津紀事訳註第一稿」の読み下しによる。以下同じ。)と称した、三宅石庵ゆずりの達筆である。(口絵写真参照)

さて、春水は宝暦十四年(一七六四)三月、一九歳のとき、持病である痔疾治療と称して、堺の医師竹田圓璡を訪ね、大坂の竹原問屋阿波屋仁右衛門宅に四カ月余り滞

在した。この時の備忘録である「東遊雑記」を検するに、当時京坂で名の知られた一一〇余名の学者・文人の名と居所がメモしてある。春水はそのうち七十数名を訪ねたと推測される。頼山陽撰の「先府君春水先生行状」には「求医上国、所到皆田舎児遇之」とあるが、それでも明和二年（一七六五）に結成される混沌社の盟主片山北海をはじめ、社友の葛子琴・木村蒹葭堂・河野恕斎・細合斗南・田中鳴門・佐々木魯庵・岡白洲らに会い、京都では江村北海・那波魯堂・斎静斎・吉益東洞・松岡仲亮・池大雅を訪ねている。江村北海宅では一宿の恵をうけており、斎静斎の塾の入門簿には安芸竹原・頼弥太郎の名がみえている。

春水は堺の惣年寄で糸年寄をかねる豪商益田睢軒（具足屋次兵衛）宅で趙陶斎に会ってその知遇をうけ、その縁で森田士徳の援助をうけることになったのである。

さて、竹山がこの「神童」の噂を聞いたのはこの間のことであろう。春水が筆硯の妙によって「神童」の称を得たのはもっと幼少期のことに属するが、竹山は成長をまたねば分らないと思ったのである。春水はその後、明和三年に「身上挙」の名目で正式に大坂に遊学し、片山北海に師事し、混沌社のメンバーに加えられ、社友から「詩豪」と称せらるるに至る。そして明和七年に上坂した尾藤二洲とともに朱子学を研究し、ついにそれまで学んでいた古文辞学・折衷学を排し、朱子学が「正学」であることを確信するに至るのである。竹山が春水賞讃の声を耳にし、詩賦・文章を読んだのはこの間のことである。竹山は真の才とは徳をともなったものでなければならぬとして、まだ全面的な信をおかなかった。

春水上坂後「数年」して、「平寿王」の宅で竹山は初めて春水に会った。『在津紀事』には「中井積善子慶、竹山と号す。弟、積徳処叔、履軒と号す。名望既に高し。竹山、平九齢に因って我が社に来り、往来、交り熟す。」とある。平寿王とは、通称大畠官兵衛（号赤水）といい、明石藩の大坂蔵屋敷の邸吏である。混沌社同人であるとともに竹山に師事していた。混沌社の例会は、同人宅で持ち回りで行なわれていたので、赤水は竹山に参加をよびかけたのであろう。竹山は、その時の春水の印象を口をきわめて褒めそやしている。さきの「過慮」は一つもないばかりか、耳にしていた以上の人物である、と。そして遂に「定交」を結ぶに至ったのである。

竹山の文中にある『負剣録』とは、春水が父を奉じて明和七年五月から閏六月までの三カ月にわたり奥羽に遊

んだ時の紀行文である。京・伊勢から東海道を上り、父亨翁の宿願であった富士を観た後、江戸に数日滞在、さらに仙台から松島を観、山寺を経て酒田に至り、象潟・出雲崎・柏崎・善光寺を廻って石山寺に詣り帰坂するという旅程であった。竹山は間を置かず著わされた『負剣録』を読んで「游已壮矣、文亦偉矣、」と感嘆したのである。

続いてこのような春水の父である亨翁のことにおよぶ。亨翁の三つの「志願」である。春水撰「先府君亨翁行状」には次のように記されている。

吾有三志、其一吾有丈夫子、願其能明志知道、解褐居高以大我門、非我願也、其二我好遊、得観富嶽則足、足跡遍于天下、我則不欲也、其三我欲相攸更宅、高堂大厦以衒人目、我則不欲也、

志願の一つは男子があればよくその志を明らかにし、道を知ってほしい、というものである。竹山の文章では「天下知名之士」となることを願うとあるが、少しニュアンスが異なる。ただし、どこかの藩に召抱えられたり、家門を大にするといったことは期待していない。二つは富士山を見ることである。亨翁は竹山の文章にあるように和歌を嗜み、馬杉亨庵に、その没後は小沢芦庵に師事した。また旅を好み、安永六年には季子杏坪をともなって石見の高角神社に遊び、同七年には春水の誘いに応じて仲子春風と吉野に観花している。三つは居宅を改築し瓦葺にすることである。これはあくまで防火対策で、人目を驚かすような「高堂大厦」を望んでいるわけではない。春水兄弟はこの父の「志願」を実現するために努力した。そして、安永五年の時点ですでに「尊人志願畢矣」と竹山は記し、膝下での寿筵でこれを誦め、と結んでいるのである。

春水が感激して、竹山の文章を巻首に配したのもうなずけるところである。

三

春水はその著『師友志』において、竹山・履軒兄弟について次のように述べている（これも頼惟勤氏「師友志訳註第一稿」の読み下しによる）。

中井兄弟、兄は積善、字は子慶、号は竹山、善太と称す。弟は積徳、字は処叔、号は履軒、徳次と称す。其の先は播の龍埜の人。後、大坂に徙る。其の父盤菴より已に名儒為り。兄弟並びに五井蘭洲を師とす。竹山、魁梧奇偉、経を治むること精密、詩文

は雄渾雅健、世の推す所と為る。履軒は較〻偏僻にして事事凡を超ゆ。詩は必ず古韻を用ひ、沈約の政を奉ぜず。文は則ち以為く、東坡の後、文無しと。竹山、時に胆張気傲の態有り。而して好人為るを害せず。長子曽弘、字は伯毅、文藻敏捷、今古比ひ罕なり。一夜に十賦を作ること再たびなり。齢三十余、病を発して起たず。竹山、懐徳書院を創る。次子曽縮、嗣いで院長と為る。竹山、人と為り、事を謀ること周備、又事を幹するの才有り。履軒、持論奇僻、皆人と乖き、自ら幽人と号す。兄弟、皆山斗の望有り。但、其の学、程朱を信じて純ならざるを恨みと為す。

「但」以下の春水の評価が注目される。「純」な朱子学者をもって任じた春水にして始めてこのように言えるのである。しかし懐徳堂の学問は、竹山にしろ履軒にしろ「純ならざる」ところに特色があったといえるのではなかろうか。もっとも頼春水・尾藤二洲・古賀精里らは竹山や履軒と最も親しく学問上の交流をもった。とくに二洲は履軒と親しかったという。安永七年閏七月、彼らは「作文会」を結成して月一回の会合を持つこととした。履軒は九月に入会した。春水より一四歳の年長である。同年十月の弟春風に宛てた春水の書簡で、作文会の模様を次のように述べている。

近著遣し候様被申越、即古賀と幽人の文写させ遣候、古賀ハ天才ニテ候、幽人ノ文不凡ニて候、幽人ハ此間之文会の題ニて候、信玄謙信不知兵とハキレハナレテ而シテ正説ニ候、両様返却ニ不及候、此間の会の席上の題ハ志尹北条答元主書、此方豊公檄三韓文、古送遣唐使序、幽人与仲麻呂在唐書と申事ニ候、古賀の差図三人ハ当惑グツトして居候へ共、皆々四ツ時ニ出来候、案外宜敷出来の祝ヒトテ幽人連飲快談罷帰候事ニ候、いつれも英雄ニて候、此等事聞及自家之警鞭ニ可被致候、

幽人はいうまでもなく履軒、志尹は二洲である。履軒がこの時作った「甲越論」「擬与留学生阿部仲麻呂書」は『弊帚続編』に収載されている。また同年十一月十三日付書簡では、二洲にとって精里は「法家払士」、履軒は「敵国外患」だと述べている。どちらも必須の益友なのである。

春水は、懐徳堂の『大日本史』を借用して安永四年から七年までの間に前後四回筆写している。これは他所からの依頼に応じたものであるが、あるいは竹山あたりの

勧めがあったかもしれない。もちろん春水一人で筆写したわけではなく、友人・門弟や郷里の弟も協力した。そのうち一部は先述のように津和野藩へ、一部は広島藩へ献本され、春水が広島藩儒として登用されるきっかけとなった。春水らがわが国の歴史に強い関心を持ち、また豊富な知識があったことは注目してよいことである。

さて、春水は竹山から、その師五井蘭洲の『非物篇』と竹山の『非徴』の校閲を頼まれている。春水はこれについて「誠ニ徂来頸ヲ延テ罪ヲ請候事ニ候、しかし君子温雅ヲ害シ可申かとも存候、快々ノ文字ニて候、」（安永七年八月四日付書簡）と述べている。この二書は、安永八年四月に至って町奉行から出版許可の内意が伝えられているが、当時朱子学者仲間の間で評判となっていたらしく、春水は次のようにも述べている。

非物・非徴早々竹山へ達候、此書ニても古賀不承知之所多ク有之候、尤至極ニ存候、志尹申ハ、天下古今人を罵詈ノ言ハ竹山の非徴ニ集り可申候、徂来ノ一か所もいふとハ無之、多クさけぶほゆるなと有之候と申候故、それゆへかロとハ不申多く啄嘴なと有之ト申候へハ、いか様と申古賀・志尹一笑いたし候事ニて候、（安永八年五月十五日付書簡）

また、安永七年閏七月五日付書簡には、「此方へも竹山之嫡子当朔日より入門、素読手本等遣候、竹山なと学ニハ深キ事ニて候、此方ニハ段々辞謝候へとも、何分来秋迄ハ承知仕くれとの事ニ候、」とあり、竹山の長子遠蔵（のち淵蔵）が春水に入門している。先述の『師友志』で春水が「文藻敏捷、今古比ひ罕なり。」と評した中井蕉園が一五歳のときのことである。この一事は、竹山の春水に対する信頼のほどを最もよく物語っているといえよう。

四

春水の竹山に対する尊敬の念は、竹山が月下氷人となってくれたことで頂点にたっした。その間の経緯を両人の書簡によって紹介しよう。安永八年、すでに三四歳になっている春水の結婚について、竹山や森田士徳らがいろいろ気を遣っていたらしい。同年八月一日付春水書簡に次のような一節がある。

竹山ヨリ先頃切々万四郎（注、杏坪。この年上坂、七月帰郷）未解纜候ヤト申来り候、何事ゾト承候へハ例之室家ノ世話ナリ、帰養モセズ候所ナレバ時ニ後レヌモ可ト存候、士徳も家内ニテ何角ト申居候トヤ

ラ内室ノ沙汰ナリ、先々大人（注、父亨翁）へ計り可被申候、子琴何ヤラ竹山ゟ申来候ニテ東西周旋、平岩此事聞付ケ聞合玉ハリ候事深切不堪感荷候事共ニ候、

七月二十九日、竹山は竹原の春風・杏坪宛の書簡を認め、春水の結婚については昨年亨翁上坂の折一任されたこと、このたび心当りがあり、春水に伝えたところ内諾を得たこと、亨翁はじめ各位が承諾されるならさらに聞合せる、と連絡した。相手は竹山の知り合いで池田の人であったが、これは破談になった。八月十八日の春水書簡では「竹山之書先書ニ申遣候、所謂縁談之一件、又々外ニ有之、此方可然候と竹山申事ニ候、今一書可差遣と被申候故、此元定候上ノ事、度々御苦労と謝置候、外とハ西ロノ篠田ト一先生ノ所生ニ候、」と新たに篠田の話が持ち上ったことを報じている。

その後九月十五日、竹山は、池田と同じ「蘭洲旧縁之内」にもう一つ良い話があり、「先方ハ勿論拙夫義縁旧懇之事故、先比罷越直談ニ及、再応も其後引合候処、彼方甚懇望之義ニ返答有之候、右之一口兼而存知居申候方に候へとも、縁女外へハ出し申間布様子に承り居候故、是迄存寄も不申候所、近比に至り様子一変、出嫁之方ニ相定申候、」として、次のような釣書を竹原へ送った。

代々ハ医家にて大坂白髪町住
旧称篠田徳安
飯岡義斎
右朱学之質行醇儒にて信従之徒も多有之候
小豆島之産　妻
当縁女　娘　二十歳
右之妹　同
義斎弟同居　篠田貞蔵
妻
子　二女　一男

一義斎男子無之故、不得止事聟養子にて可致哉と年来心懸候へとも、相応之人物も無之、追々女子も嫁年に逼り候故、名跡は弟を以相続為致、医業相立、自分ハ故有而飯岡之姓を用、女子ハ出嫁之積りに近比相決申候事

一縁女婦功ハ十分ニ出来申候、手並も相応ニ宜敷候よし、見及候事ハ無之候

一婦徳随分柔順無非相聞へ申候

一婦容実ニ十人並ニ見受申候、装飾質実少も目に立

不申候様子にて候
一筋目ハ宜敷由兼而承り居申候、委細之義ハ未相糺し不申候
一資装ハ一向ニ調不申候、実ニ当分之我衣我私挟箱壱荷簞笥一長持一、此外一芥も増添出来申間布との事
一拙者義妹(鷗洲娘)配し申候長島惣介之母之為ニ右義斎ハ侄にて候、右惣介と齢ハ余程違候へとも、内外兄弟ニ当り候と覚へ申候、拙夫も右之義縁を以、年来心易出会申候事に御座候
荒増右之通りに御座候、以上

九月　　中井善太

頼(春風)千齢様
頼(杏坪)万四郎様

縁女の名は静子という。竹山の釣書はさすがに要領よく篠田家と静子の様子や人となりを伝えている。五井蘭洲との関係もこれではっきりとする。竹山は春水への添書で「先夜ハ匆々遺憾、然者御国へ之一通認見申候而懸御目候、妁口多候て可厭なと可被思召哉、如何、呵々、」と述べている。春水は弟たちに次のように言っている。

別帋中井々又々書札を被越候、此外承候事多候へ共、此外ニさのミ可申進事も無之候、篠田翁竹山へ被申候ニハ、別ニ自慢ハ無之候、縫針を能ク仕候、生来琴ヲ習ハせ候事無之候、此二ツのミ自慢と被申候由物語ニ候、此ニて大抵要領ヲ得可申候、竹山ハ何とそ此返書早々承度、扨又納幣等之事、尊翁御指図等ハ無之哉なと申候得共、是等別段有之間敷、土風ニ従ひ時宜ヲ考へ可申事と申置候、大抵十ニ八九此度之分ニ従ひ可申、（九月十六日付書簡）

九月二十四日付の春水書簡ではすでに静子との結婚を決定し、納幣・引取り準備・媒酌等々について報じている。

篠田方一件一決ニ而候、昨日も又々竹山へ参及此事候、平岩も折角奔走、何分可然、此它似合敷有之間敷、急々一決候様皆人被申候事故、段々承糺候所、先ハ無瑕ニ相聞候、夫故納得候旨及内通候、左候へハ納幣之事、来月(神無月)ヲ必可避候ニ非候へ共、願ハ今月之内ニ仕候てハ如何ト竹山内意随分尤ニ相聞へ、夫故此旨一応士徳へ申談候上ト申置候段相考候所、一応其地之消息承候上ニ可仕内決申候、先書ニ遠方彼此ニ不及候旨、竹山へも此方へも被申越候得共、所

詮此方引受候事、来月来々月ニも相成候へハ、其内ニハ是非共一消息ハ可有候へハ、然レハ其時ニ納采ヤラ引越ヤラト事急ニ取計可申候、当月ニ必遣候事差急キ候訳も無之候、此段ハ竹山も其旨尤との事ニ候、士徳ハ昨夕参候留守ニ而未及其事候、此男左様之頓着如何様ともと申事ニ候、彼此平岩へ士徳談合ハ行届候事ニ候、子琴ト安道ト談し、内普請之事急ニ可仕候、此事等扨々混雑大雑費と被存候、引越候事、篠田より竹山へ兼而ハ来春ト申事ニ候得共、竹山より大人之御内意等ヲ先方へ申通候へハ、此方来春ト申ハ必竟資装等之修理用意之事也、皆私意也、此方ニも実ハ急々取結片附度候へハ同意との事、何分来々月五日十五日、或ハ廿日廿五日なとゝ可仕かと存候、大坂之風俗ニ而媒灼ハ其両家より下等之者仕候事也、然ル所竹山自此儀可仕との事、納采之使者ハ丹六ヲ遣ひ可申様申候得共、是ハ香清等可仕かと存候、それ共此瑣事如何様ニも可相成候、右納采ハ時宜ニ従ひ可申候、凡ソ帯代とて金壱片、或ハ五百疋千疋、鰹節・酒尊などいふ類なるべし、是等先方殊外軽々ニ仕くれとの懇意之論も相聞候、

長文の引用となったが、関係者それぞれの気持が手にとるように分る。さて納幣は士徳らの勧めもあって九月末日に行なった。表向の媒酌は竹山であるが、使者には本屋文助という者が立った。幣物は、帯代金五百疋・鰹節に絹地一反を添えた。竹山は「それハ過候、三百疋ニて可然」と言ったという。春水は弟に「必礼服ニて墓下へ告可給候」と頼んでいる(九月二十五日付書簡)。その後十一月四日、春風が竹原から上坂し、八日に一同は篠田家へ行き「新迎之礼」を取り行なった。

余の燕爾に於ける、竹山自ら氷人と為る。岳翁の歯徳を崇び、且つ家居の托有るを以てなり。時に十一月為り。余冬日に炉せざること已に久し。子原〔今井重憲。佐兵衛と称す〕家人の為に一炉を送る。此に於いて始めて炉有り、女僕有り。是の時、竹山、合巹の頌を作り、都下伝へ称す。(『在津紀事』)

翌年末、山陽が生まれ、次の年には春水は広島藩儒に登用され、大坂を去るのである。

〔付記〕「丙申寿巻」および文中の書簡類は、すべて竹原・春風館所蔵。

(広島大学助教授)